

実践事例 ③

文章を吟味し、自分の意見や考えをもって読み進める力を

「新聞の投書」を吟味する (6年)

新しい指導を考える会

1 文章を吟味する力

子どもたちに、教師の発問を待たずに自分の力で文章を読み進める力をつけたい。私は、そんな願いをもちながら国語の指導を進めている。

このような指導の手立ての一つに「吟味よみ」実践がある。「吟味よみ」とは、読むべき文章において、用いられている言語表現・言語内容を批判的に検討しつつ読解させる指導である。これは、秋田大学の阿部昇氏が提唱しており、阿部氏は著書『文章吟味力を鍛える―教科書・メディア・総合の吟味』（明治図書出版）で具体的手立てを詳細に述べている。この本をもとに、私なりに吟味力をつける指導の構想を立て、実践を重ねてみた。

「吟味よみ」とは、一つの独立した指導法ではない。文章構造や段落関係を学んだうえに行なわれる指導である。ただし、本稿では「吟味よみ」のみを取り立てて述べる。

2 獲得させる力と指導構想

私は吟味よみで、次のような力の獲得をねらっている。

第一は、文章の細部にまで目を向ける力である。批判的に検討しつつ読むには、なぞるような読みであってはならない。読み飛ばし、読み過ぎにより恣意的に判断していた文章に対し、立ち止まりが生じるようになる。

第二は、文章を書く力である。他人の文章を吟味した、その文章検討の術を用い、自分で文章を書いてみる。例が

適切か、論理に不整合はないかなどを意識しつつ書くようになる。

第三は、文章を能動的・主体的に読み取る力である。吟味よみは、教科書や新聞といった権威ある文章を、批判的に読むのである。自分の意見や考えをもって読み進めようとする姿勢が見えれば、それを大きく評価したい。

このような力を、どのような系統で獲得させていくか。私は、吟味よみの小学校六年間の系統を次のように定めている。

〔第Ⅰ期……一年生〕

・ ひらがな・かたかな・漢字という文字を獲得する、国語の入門期である。音読をはじめとした表層の読みが中心になる。したがってこの段階では、特に吟味よみは行わない。

〔第Ⅱ期……二・三年生〕

・ 発展的な読みを中心にする。二・三年生段階においては、批判よりもイメージを広げるような読み方が意欲をもたらしものである。書かれて内容を確かめるという作業過程の中で、もう一度文章に立ち返ったり、自らの考えを再確認させたりする。

〔第Ⅲ期……四・五・六年生〕

・ 事実・論理・主張の点から検討する。

私は、現在六年生を担当しており、ここでは〔第Ⅲ期〕の指導構想を詳しく述べたい。「事実・論理・主張」という三点は、具体的には次のようである。

■それは事実としてとらえてよいか？

まずは新聞記事を示し、事実を伝えた。次のとおりである。

「フィギュア・グランプリファイナルで浅田真央が初優勝を決めた。日本選手のグランプリファイナル優勝は〇三年の村主章枝以来二人目である。実力ナンバーワンとなった彼女だが、国際スケート連盟が設けた年齢制限規定（〇五年七月一日までに十五歳以上）があるため、トリノ・オリンピック出場資格は与えられなかった。これについて賛否両論が出された。」

・ 賛成↓医学的見地による年齢制限規定というルール遵守が当然だ。

・ 反対↓ここは何らかの特例を設けて、本当に実力のある選手を出すべきだ。

笑顔で氷上を滑る浅田選手の写真も添えながら、右のような事実を説明した。なお、参加を認めてはどうかという意見がたくさん出ており、朝日新聞の社説もそのように訴えていること、さらに小泉首相も同様の発言をしているといった関連記事も付け加えた。

この後、子どもたちに賛否を聞くと、出場を認めよとの立場が多かった。

「では、ここで新聞記事を配ります。十二月二十一日の読売新聞の投書欄に掲載された『浅田選手の演技 トリノで実現を』（東京都 石橋基耀氏）という記事です。参加を認めよとの立場で書かれた内容です。この文章を吟味しなさい。『それは事実としてとらえてよいか』『その論理は正しいか』『その主張を認めるか』という三つの点で吟味するのです。」

3 投書文を使った実践報告

次に、六年生に行った実践を述べたい。

昨年末の読売新聞投書欄に浅田真央選手のトリノ・オリンピック参加を働きかける文章が掲載された。この文章を吟味した。

このように指示して全文を示した。(段落番号は筆者が記載)

「フィギュアスケートのグランプリファイナルで初優勝した浅田真央選手は、すばらしかった。ピシッと決めるトリプルアクセル（三回転半ジャンプ）、スピンのようにフィニッシュには表現し尽くせないほど輝く笑顔。来年のトリノ五輪優勝に最も近い女王、イリーナ・スルツカヤ選手を圧倒しての優勝だった。」

「しかし、トリノ五輪には、年齢が足りないため出場できない。『浅田選手を出すべき』という声が出るのは当然のことだが、日本スケート連盟は特例の要請を断念した。国際スケート連合の否定的な見解をふまへ、さらに国内の代表選考に影響を与えたくないとの配慮も働いたという。」

「3 おかしい。浅田選手が不参加のまま別の選手が金メダルを得ても価値はどうだろうか。連盟が声を上げて訴えてほしい。」

「4 日本、世界の誰もがトリノ五輪で浅田選手が跳び、華麗に、かわいく舞う姿を見たいと思うだろう。門はたたかなければ開かれない。かれんな浅田選手のため、国を挙げて五輪の扉をたたこう。」

H 「最後に『国を挙げて五輪の扉をたたこう』と書いてあるけれど、どうすることなのだろう？」

I 「それは心構えとか、気持ちということだよ。」

J 「でも『国を挙げて』というのだから、I 君にも関係あるんだよ。できるんですか？」

K 「私は、投稿者の気持ちがよくよくわかります。だから『その主張は認めるか』といわれれば認めます。でも何かちょっと強引のような気がするんだけど……」

教師の助言を受けながら、このような発言が出された。投稿者の気持ちはよく伝わってくるけれど、「おかしい」と断定されたり、「誰もが見たい」などと決めつけるように言われたりすることには納得しがたいという意見が多かった。

次に、オリンピック不参加は当然という立場で文章を書かせることにした。事前に、次のような説明と指示をした。

「完璧な文章というものはありません。文章とは制約の中で、また対象を意識して書かれるものです。主張を明確にするために、不必要と判断した情報は書きません。それらを考慮しつつ、吟味することが大切です。では、今度は発信する側になります。完璧などありませんから、のびのび書きなさい。ただし、それは事実か？ 論理としてつじつまがあっているか？ 主張ははっきりしているか？ といった三つの点は意識して書いてもらいなさい。」

子どもたちの意見には、次のような内容のものが多かった。

前述の三視点での吟味をノートに書かせた後、発表させた。次のような討論になった。

A 「1 段落の『すばらしかった』や『表現し尽くせないほど輝く笑顔』はおかしいと思います。なぜなら、『すばらしい』と感じない人もいますからです。」

B 「それは違う。だって『すばらしい』と感じたのは投稿者だから、それは投稿者の気持ちでいい。」

C 「4 段落の『日本、世界の誰もがトリノ五輪で浅田選手が跳び、華麗に、かわいく舞う姿を見たいと思うだろう』は決めつけている。」

D 「賛成。浅田選手のライバルの選手の家族は、浅田選手よりも自分の家族が選手として出てほしいと思う。『誰も』のわけはない。『それは事実としてとらえてよいか』という、事実ではないように思います。」

E 「僕は、『かわいく舞う姿』を見たいなんて思わない。これは、自分（投稿者）がそう思うから皆もそう思うと思っているのだろう。」

F 「でも、その文章の最後に『思うだろう』と書いてあるのだから決めつけているわけではないんじゃないの。」

G 「3 段落に『おかしい』と書いてあるけれど、『おかしい』理由が書かれていない。2 段落で、年齢のことと代表選手に影響が出るといことが出られない理由だと書いてあるのに、『おかしい』の後は、そのことを問題にするのではなく、金メダルの価値のことを言っている。これは、『その論理は正しいか』ということでも正しくないと思う。」

- ・ ルールを守るのは当然。子どもも見ているのだから、「ルールなんて、自分たちの都合のいいように変えればいいんだ。」と思わせたら、教育上よくない。

- ・ ルールを変えてまで出たら、真央さん自身のためによくない。他の選手からいじめられることも考えられる。

- ・ スポーツはルールを守ってこそ成り立つ。僕だってサッカーで警告を与えられれば、それが不満であっても従う。それがスポーツマンシップだからだ。

- ・ 浅田選手が出なかったら、優勝した選手がいても、それは本物ではないとの意見があった（新聞記事を紹介した。それは優勝した選手に失礼だ。

最後に、オリンピック不参加は当然であるとの立場での投書を紹介した。十二月二十三日付の朝日新聞「声」の欄にある「若い真央さん 特例扱い誤り」（川崎市 岩田欣三氏）という投書である。この文章では、次の箇所を「僕たちは思いつかなかった」「なるほどと思った」と評価した子が多かった。

「私は聞きたい。四年後に、仮に浅田選手が世界の頂点に立っていたとして、突然、年齢制限にかかる優れた外国の少女が現れたら、小泉首相や朝日新聞は、今の主張を繰り返すだろうか。」

子どもたちは、六年生の三学期ということもあり、文章の細部にわたって読むことができるようになっていた。今回の実践でも文章読解のおもしろさを再認識した子が多かったと感じた。